

アンコンシヤスの雨

秋山達子

サマセット・モームの傑作の一つといわれている『雨』という短編がある。

昔、ジョーン・クロフォードという女優の主演で映画化されたこともあるので、年輩の方はきっと覚えていられるであろう。南太平洋の孤島の雨期、毎日雨また雨の暗い雰囲気の中で、人間の無意識的な葛藤が表面にあらわれ、抑圧されていた欲望がきらめきだして、一人の牧師の自殺に終わるというストーリーだが、雨が人の心の深奥にあるさまざまな問題を浮彫りにする過程を如実に表現したもの

だった。

降り続く雨の中で、一人の娼婦が改心し、天使のような美しい影の面をあらわし、その姿を見て、謹厳な牧師が逆に欲心を起こして自殺に追いこまれてしまう。暗い雨模様の波うちぎわに、地引あみにかかった牧師の溺死体があがる画面は今でも忘れられない。そして、人間の弱さに絶望した女は、雨季が明けると同時に、再びもとの娼婦の姿にもどる。日本の雨季は、インドや南海のモンスーンのように豪雨が続いて洪水となるほど激

しいものではないけれども、それでも、人々の心の影の面を誘いだすような、不思議な力を持っているように思う。

ユング心理学では、水は無意識の象徴だという。すべてを呑みこみ、また生みだす大洋や、森蔭からこんこんと湧きだす生命の源のような泉が、恐ろしくもあり、また貴重でもある無意識的な力を示すものということは、誰にでもすぐ想像がつくことであろう。しかし、雨もまた水であり、考えれば六月の梅雨時というのは、そんな無意識的な力が、人々に特

に強く働きかける時かもしれない。ある
ユング派の心理学者が、雨の夢を見て、
「アンコンシヤスが、空からポツポツ落
ちてきました……」

などと言ったことがあって、ほんの笑
い話と思っていたけれども、雨はたしか
に、日頃の自分とは違うムードをかもし
だすようである。

子どもたちの相手をしていても、普段
はおとなしい子が急に騒がしくなっ
り、日頃、走りまわってはかりいて、ち
つとも落着かない子がしょんぼりと一人
で考えごとをしていたりする。雨、それ
も降り続く雨は、どんな人にも影響を与
え、いつもとは違う面を引きだすもの
ようだ。そういえば、私の親友にどちら
かというとメランコリーな、暗い感じの
人がいるが、彼女は雨降りの日が大好き
で、いろとりどりの雨傘を見てみると、
心ははればれとするのだそうである。雨

の日はユーウツだと思えばかりではない
らしい。しかし、この人は例外で、雨の
日が好きなおとなは、かなり変人の類に
入るのではないだろうか。しかし、子ど
もたちは、雨に対して、もつと違うイメ
ージを持っているようである。

雨、雨、降れ、降れ、かあさんが、
蛇の目でお迎え嬉しいな

ピチ ピチ チャップ チャップ

ラン ラン ラン

という子どもの歌も、雨がかえって明
るい感じを子どもたちに与える一つの証
拠かもしれない。もちろん、どの子にもと
いうわけではないだろうけれども……。

梅雨時の子どもたちの教室は、皆が外
に出られないだけに、ガヤガヤと声が部
屋の中にこもり、それに日本特有の湿気
がまざって、生暖かく、どこか無意識の
母親の胎内を思わせる。子どもたちは、
そんな世界の中で違った自分を体験し、

変容し、また変容を重ねて成長する。ち
ょうど春先に一雨ごとに若木の芽がのび
るように、そして、梅雨時に、急に若葉
が目にしみるように、さらに夏の俄雨、
秋の長雨を経て、木々が姿を変え、年輪
を重ねてゆくように。

梅雨時の心境の変化は子どもたちにだ
け起こるものではない。子どもの面倒を
見るとおとなたちも当然、影響を受ける。

しかし、おとなの場合は、かえって屈折
した心理状態になってしまつて、あまり
成長にはつながらないような気がする。
雨季は多くの子どもには成長の糧^{かた}なの
に、大部分のおとなには、逆に抑圧のき
っかけになるのは、なぜだろうか。その
あたりに、無意識の世界で無邪気に遊べ
なくなつたおとなのかなしさみたいなの
があるような気がする。大自然の四季
の移り変わりと、人の心の問題は、もつと
研究されてもいいのではないだろうか。